染織とグローバリゼーション
―アンディエンヌ（更紗）からジャポニスムへ―

廣　瀬　　緑*

１．東洋と西洋を繋いだ更紗

更紗は、17世紀の東洋と西洋の両方において流行になった染色品である。日本へはオランダ東インド会社によって桃山時代の日本にもたらされ、当時の人々はこの華やかな木綿布に目を見張った。大名や粋人たちは競ってこれを買い求め、袋物や煎茶の敷物として珍重した。ヨーロッパでも中世から更紗は知られていたが、16世紀には絹織物工業が各地で発達し始めていたので、本格的な更紗の消費ブームが訪れたのは、やはり日本と同じ17世紀後半のことと言える。それらは、イギリス・オランダ東インド会社によってもたらされた更紗で大変な流行となっていた。このように17世紀後半は更紗によって東西が一つの流行でつながったということがまず言える。

鎖国時代の日本においてもかなりの量の更紗が日本へ入っていたことは名物裂や更紗見本帳などの現物からも知ることができる。例えば、前田家の三代目藩主が1637年に長崎で買い求めた名物裂や京都工芸繊維大学が大正７年に購入した篠崎家蔵「紅毛船端切本帳」（図.１）[1]はオランダ船によって嘉永二年（1849年）から万延元年（1860年）にかけて日本にもたらされた見本帳である。この見本帳の中にはフランスのミュルーズで作られた製品と類似しているものが多数見受けられる（図.２）。19世紀を通じてミュルーズの染色品の重要な輸出先はオランダであった[2]から、オランダを通じてミュルーズの更紗が開国前の日本へ輸出されていた可能性は十分高い。日本へ渡ったヨーロッパ製の更紗は「ヨーロッパ更紗」、あるいはオランダ船によってもたらされたことから「オランダ更紗」と呼ばれている。

もっとも更紗という言葉自体も日本だけで用いられている輸入語で、その語源についてはジャワ語のセラート serat、あるいはポルトガル語のサラカ saraça あるいは昔、西インド海岸の要港であっ

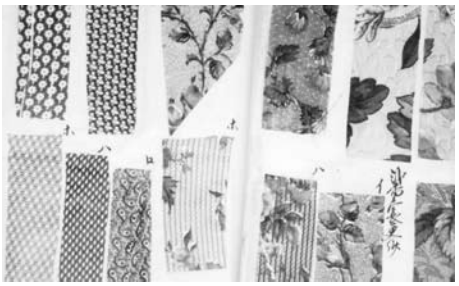


図.１：紅毛船端切本帳、京都工芸繊維大学資料館

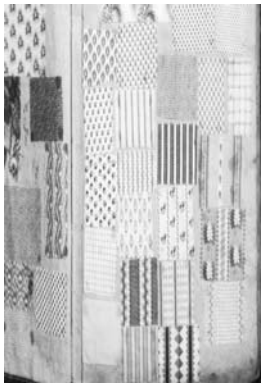


図.２：ミュルーズの染色布見本帳、19世紀、ミュルーズ染色美術館

＊パリ・ディドロ（第七）大学准教授

たスラートから染織品が多く輸出されたので、これが訛ったものとも言われているがはっきりした由来がわかっていない。

2．フランスにおける更紗の歴史

このように東西において大流行となった更紗が、フランスでは17世紀の後半からまず南フランスで生産されるようになるのだが、それにはいくつかの重要な要素が揃っていたことがあげられる。

図.3：フランス地図

東インド会社がもたらした外国の品物は当時、ナント、ルアーブル、マルセイユなどの港に着いたのだが、南仏のプロバンス地方では中世から毛織物、麻織物が作られていたこと、マルセイユでは船の帆に使う生地が作られていたことから、この地方で特に更紗が急速に生産されるようになっていく。更紗の複雑な模様は手描きで模様をつけ、それにはモルドンmordantsと呼ばれる化学液が使われた。これは媒染染色のことで、鉄塩や明礬が使われた。このモルドンの液を筆にとって模様は手描きで描いていた。これを染料で染めるとモルドンの染み込んだ部分だけに色が付き、ついていない部分は洗うことによって色が落ちる。このように、全て手描きで作業が行われたため、出来上がった更紗は大変高価なものとなり、一部の富裕層だけが手にすることができる貴重なものであった。更紗の染織技術はインドから後にペルシャやトルコなどにも及び、そこでは版木を使って大量生産が行われ、比較的安価で販売された。この種の更紗はシャファルカニスChafarcanisと呼ばれて、マルセイユ、プロバンス地方に大量に輸出された。そして、製品だけではなく、この染色技術もヨーロッパに広がり、特にマルセイユはその生産が最も盛んな場所になっていく。それは、マルセイユが港であったということ、ちょうど同じころにタロットカードがマルセイユで生産されるようになり、その印刷技術が更紗の捺染技術に応用されたということがある。例えば、1648年にはカード製造者のゴトーヌGAUTEAUNEと刷り師のバヴィーユBAVILLEが共同で更紗の版木を作ったという記録が残っている。その後、更紗の流行に歯止めをかけようという動きがあがり、1686年には更紗の製造が禁止になる。

マルセイユでは、その後もプロバンス地方と植民地への輸出のみという条件で生産が許可されたが、1759年に禁令が解かれるまで、各地で生産が下火になっていった。

3．ミュルーズにおける日本様式の染織品

さて、アルザス地方の都市ミュルーズは18世紀半ばから20世紀半ばにかけて染色産業の町として非常に栄えたところである。ミュルーズが染色産業の町となったわけは、実にこの更紗に由来している。1686年には更紗の輸入及び製作を禁止する法令が出されたが[3]、ミュルーズは1790年までフランスではなく独立国であったため、この法令が適用されなかった[4]。そのため、この間ミュルーズでは更紗の輸入が続けられ、大きな利益をもたらすこの更紗を自らの手で製作することを目的に、1746年、３人の若いミュルーズの青年たちによって更紗製造の工場がクークラン・シュマルツェール・カンパニーKoechlin,Schmaltzer & Cie

の名前のもとに設立された[5]。

３－１．日本様式の染色布と下絵について

ミュルーズの捺染デザインの傾向については、18世紀当時、アルザスには独自の流派の図案は存在せずインド更紗の摸倣の他、当時流行したロココ風及び中国人のいる風景などシノワズリーのモチーフ、そして自然の花を図案にする傾向があった。これらはパリのゴブラン織工場やリヨンの絹織物工場のデザイナーたちの図案を参考にしたものであった[6]。1810年にはニコラ・クークランFrères Nicola Koechlin et Cieによって創始されたトルコ赤fond rouge turcの地色に染められた花の模様が19世紀アルザスの代表的な製品となる[7]。（図.４）

図.４：19世紀初期の典型的なミュルーズの花柄布、トルコ赤地、ミュルーズ染色美術館

特に花の図案は19世紀を通じて重要なモチーフでインド更紗的な花、自然主義的な花、幻想的な花などバリエーション豊かな花柄が次々創作された。

生産の規模については、19世紀初期から生産量は年々増加し、1870年の普仏戦争を境に1910年頃までは生産量に変化がない[8]。そのうち、輸出の占める割合は、19世紀初期では生産の半分、1858年頃にはその2/3を占めており、大半が輸出に当てられていたことがわかっている。1806年にはナポレオンが西ヨーロッパをほとんど支配し、大陸を封鎖することでイギリスからの輸入を禁止する政策をとったため、ミュルーズの製品はこのころからナポレオン帝国内とライン左岸、オランダが主な輸出先となる。また、王政復古の1830年代には輸出先としてオランダ、イタリアが主になっている。このことはオランダを通じてミュルーズの製品が日本へ渡った可能性を強く示している。19世紀になると技術的進歩、特に化学染料の発見とローラー捺染機の発明により生産が飛躍的に伸びている。また、1860年には英仏通商条約、61年には仮輸入制度によってフランス市場が開放され、それまでの保護貿易体制から自由貿易体制へと移行したから、このころはミュルーズが最も栄えた時期であったと言える。

表.５：「ミュルーズ染織美術館」第１巻、学研、1981年、及び *Bulletin de la société industrielle de Mulhouse*, No.I-II, 1950より作成

年	捺染生産量/m	職人数/人
1786	6600000	
1806	6500000	7000
1827	18000000	27(マニュファクチュア)
1839	29000000	40(マニュファクチュア)
1840	40000000	14000
1858	48000000	9800
1860	51000000	
1869	82000000	
1877	55000000	
1910	55000000	

このような状況のもと、19世紀後半になるとミュルーズでは日本の図案を持つ染色布を作り始める。これは日本の開国をきっかけに日本を新しい輸出市場とみなしたからで、日本趣味がもととなったというよりは、経済的な理由が主で、ジャポニスムの初期の段階と言える。現在ミュルーズ

の染色美術館には、19世紀後半のフランス人の手による日本様式の下絵や染色布などが多数現存している。これらの作品はいずれも竹や雀、団扇、桜、松など日本的な図案を持つもので年代的には1850年から70年代にかけて作られたものである。デザインの特徴は大きく分けて次のように三つに分類できる。

1．全く日本の伝統的な模様を複写したもの
2．日本のイメージの誤解から生まれたやや調和に欠けるもの
3．西洋的な図案と日本の伝統的な模様を組み合わせたもの

1に対応する例として図.6に見られる図案があげられる。これは、「斧琴菊」模様といって典型的な日本の模様で語呂合わせになっていて、斧と琴柱と菊の花の三つを染め出して「良き事を聞く」の意を寓したものである。

図.6：モスリン見本布、ミュルーズ染色美術館

図.7-aは1867年にクークランS.Koechlinによって雀と稲穂をモチーフにした下絵であるが、図.7-bにあるように、これと全く同じ図案を持つ日本の布がそれより前の1862年にリヨンの織物デザイナーによってリヨン織物美術館に寄贈されている。クークランがリヨンでこれを参照したものか、あるいは全く同じ日本の布を所有していたのかは分かってない。リヨンにあるものは日本のものなので、こちらが図案のオリジナルであると考えられる。

図.7-a：染色布用下絵、ミュルーズ染色美術館

図.7-b：日本の染色綿布、リヨン織物美術館

図.8は龍田川模様と雀の組み合わせで、これも典型的な日本の図案である。同美術館に1874年に受け入れられた日本の染め型紙とよく似ている(図.9)。これらの染色布の多くは紅色のものが大半で、化学染料で鮮やかに染め上げられ、日本で作られていた板締[9]のパターンを捺染によって再現したものとなっている。

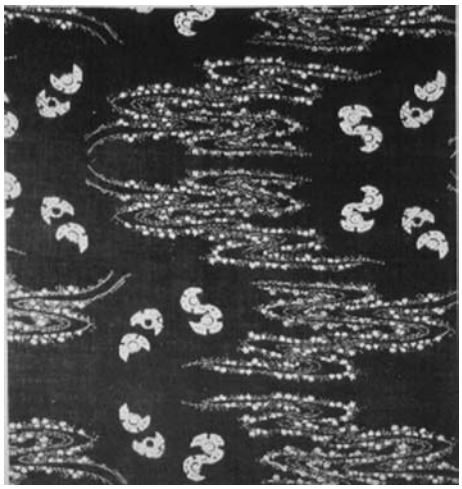
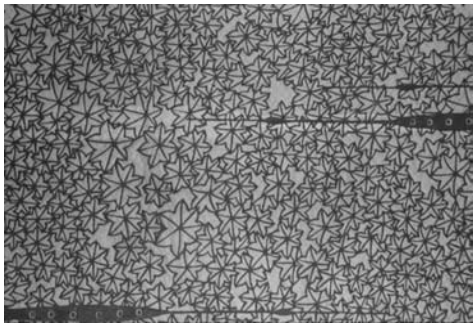


図.8：モスリン見本布、ミュルーズ染色美術館



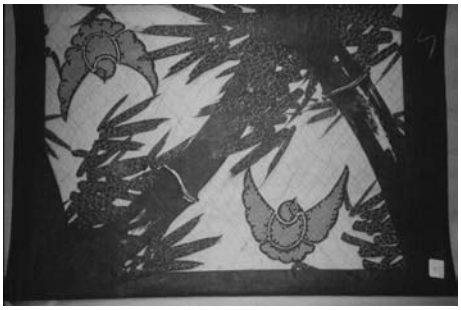


図.９：日本の染型紙、ミュルーズ染色美術館

次に第２の分類に当てはまる日本のイメージの誤解から生まれたものの例として、図.10があげられる。この図案に見られるように、麻の葉、笹といった伝統的模様を取り入れながらも、ミュルーズが従来から輸入してきたインド更紗に見られる花の模様を取り合わせたちぐはぐなものとなっている。

図.10：左は染色用下絵、右はミュルーズで古くから描かれてきた更紗に見られる花、共にミュルーズ染色美術館

図.11は鶴と一緒に竜を描き、紅葉のような植物を描いて、奇妙なキノコのような模様を配している。このカテゴリーのものは下絵に多く見られ、日本の伝統模様をいくつかパッチワーク的に貼り付けたものが多い。

図.11：染色用下絵、ミュルーズ染色美術館

第３の分類に対応する例としては、図.12に見られるように、日本の伝統模様と西洋の図案をどのように調和よく組み合わせたらよいか考えた苦心の跡が見られる。これらは色々な日本の伝統的モチーフを寄せ集めたものとなっており、笹、梅、青海波、宝尽くし、朽ち木といったモチーフをふんだんに取り入れている。この作品は特に図.13の染型紙と非常に類似している。

図.12：染色用下絵、19世紀後半、ミュルーズ染色美術館

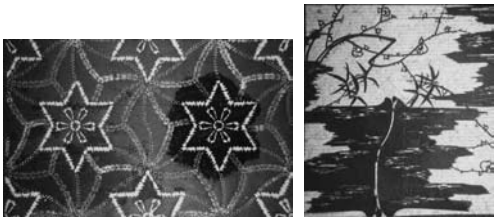


図.13：日本の染型紙、ミュルーズ染色美術館

おもしろい図案としては図.14にあるように日本の文字を取り入れた作品もある。図.14上の図はひらがなを散りばめたもので、下の図は漢字を表そうとしたものである。文字をデザインとして見ているため、上下逆になっている。

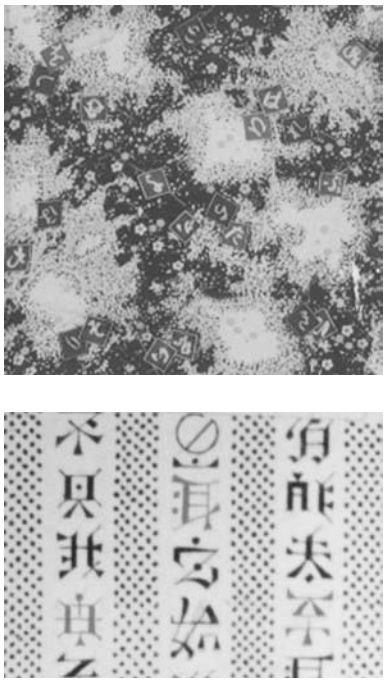


図.14：上：モスリン見本布、下：染色用下絵、共にミュルーズ染色美術館

次の図.15は朽ち木模様にバラなど洋花を取り込んだもので、全体としては友禅の雰囲気を掴んでいる。明治38年頃、日本においてもこのような洋花模様が流行したのは逆にこうした作品が影響を与えたのであろうかと思われる。

図.15：モスリン見本布、ミュルーズ染色美術館

それにしても、第２、３のカテゴリーに相当するものが日本人の目にとって異様に写るのは、モチーフの組み合わせを考えずに用いているからに他ならない。日本のモチーフには獅子に牡丹、松竹梅など組み合わせの決まりがあり、これらは古くからある逸話や詩、季節観などに基づいており、日本の文化を知らなくては組み合わせられない。しかし、ミュルーズのデザイナーのように外国の模様を取り入れ、その各国の伝統に縛られることなくモチーフを自らの美的感覚のみで組み合わせることができるというのは、この地が新しいデザインを生み出す大きな可能性を含んでいた場であったと言える。また、第２、３のカテゴリーのものは、特に色彩において赤と青の補色を使ったコントラストの強いものが多く、そのことは全体の調和を欠く一因となっているが、これは浮世絵、特に明治の錦絵の色彩感覚と非常に共通しており、デザイナーがそれらを参照したことは想像に難くない。

３－２．日本風モスリンの作られた経緯

日本風モスリンの作られた経緯については、いくつかの記録が残っている。1902年発行の「19世紀におけるミュルーズとその近郊の産業の歴史」*L'histoire documentaire de l'industrie de Mulhouse et environs au XIXe siècle*という書物には次のようにこれらの製品が日本へ向けてのものだと記録されている。まず、

「1863年、ミーグ工房では、モスリンは日本へ

の輸出、カシミア、ウール・ポプリン（平織）はトルコやペルシャに輸出していた[10]。」

「1867年、エイルマン兄弟社では、毛織物に巧妙なデザインを捺染したものを日本への輸出用として生産していた[11]。」

「1869年にシュレール・ロット社ではローラー捺染で作った製品を日本向けに生産していた[12]。」と記されている。当時は、イギリスとの輸出競争が激しくなり、イギリスが条約を結んだ国への輸出は困難になりつつあったから[13]、日本を輸出先として、日本人の好みに応じた製品を作っていたとしても不思議はない。

これ以外の資料としては、1865年頃、図案は日本から送られ、それをもとにモスリンに染色を行ったという記録が1894年５月28日ティエリー・ミーグ氏によって残されている[14]。それによると、

「1865年ころパリのブテという人から日本への輸出用として私たちの工場に生産を依頼してきた。最初は全て手描きで行っていたが、やがてローラーを使って染めるようにした。色は赤、ピンク薄紫が主で、後に日本的な図案をグレーや紫などで染めた。これらの生産は年を追って増えたが、あくまで輸出用であった。」とある。

一方、これらのことを裏付ける日本側の資料としては1929年発行の「染色図案變遷史」の中に明治９年（1877年）には図案は日本で考案し、その図案をもとにしたモスリンを外国で製作したとある[15]。また、当時の話として、京都の更紗屋「京源」の平井岩太郎氏が、「日本から送った図案が航海の途中茶色っぽくなったものだが、そのまま茶色っぽい地染めをして送ってきたので洋反物屋は大損害を被った」と語っている[16]。1877年という年は美術館の記録にあるティエリー・ミーグ工房Thierry-Miegが日本の図案をもつ染色布を製作した頃と大体一致している。

このようなことから、製作の目的はもっぱら日本への輸出を考慮したものでフランス国内における日本趣味より時代的に早く、それとは少し別のものと考えられる。これらの日本様式を持つ捺染布はデザインの点においては日本の図案の模倣から抜け出ていないもので、洗練されたものとは言い難い。しかし、開国後数年ですぐ日本様式のモスリンを製作した着眼点は鋭いと言える。しかも、モスリンの日本への輸出はミュルーズだけではなく、その後の日本におけるモスリン産業の勃興、特に染色技術の発展とモスリン図案の改良へと影響を与えていくこととなる。

４．日本風図案の出所

では、いったい日本の図案の情報はいつ頃から、どのようなルートを経てこの地にたどり着いたのか。また、日本とミュルーズの間に染色産業を通じたどのような情報の行き来があったのか。

特に早い例は、1837年のミュルーズ産業協会報告書に見られるもので、産業協会に日本の美術品が贈られた記録が残っている。「産業協会の会員でバタビア駐在のナンシーのセザー氏から中国と日本のいろいろな珍しい品物が寄付された。」とある[17]。その後、日本の開国後、ミュルーズと日本の関わりは日本趣味の流行によっても加速していく。その様子は、ミュルーズ染色美術館への寄贈品の中に見出すことができる。その貴重な記録は、ミュルーズのデザイナーショーンノップSchoenhaupt（1822-1895）の所有していたデザインアルバムで、アルバムの年代は1880年代と推定されている。アルバムにはショーンノップ自身によると思われる浮世絵風デッサン（図.16）、浮世絵版画類、ちらし、などが約40点ある。

図.16：ショーンノップによる浮世絵風の図案、ミュルーズ染色美術館

これらは広重、歌麿などの江戸の浮世絵の他、明治後期の芳瀧（1841-1899）の浮世絵が何点か含まれている（図.17）。芳瀧はショーンノップとほぼ同じ時代を生きた人で、彼の作品は２度1883年のフランス装飾美術展覧会でも展示されている[18]。しかも、彼は大阪の南本町二丁目、舶来モスリンの問屋が並ぶ繊維の町船場のど真ん中に住んでいた[19]。またアルバムには図.18にあるような萬本類もあり、デザインの参考にされたものと思われる。この図案集もまた大阪心斎橋塩町角、版元綿屋喜兵衛と記されており、これも船場のすぐ側である。これらの浮世絵が二つとも染織の町、船場から来ていることは偶然であるのか、あるいは洋反物の取引に関連して船場から送られたものか興味深い。

図.17：ショーンノップのアルバムに張られていた芳瀧の浮世絵、着物に絞りの図柄が見られる。ミュルーズ染色美術館

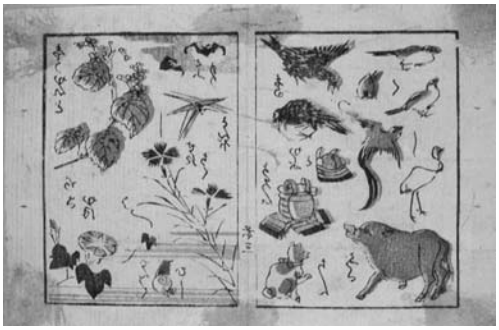


図.18：萬本類、版元綿屋喜兵衛、ミュルーズ染色美術館

また、アルバムにはミュルーズの雑貨屋ディートランの店の広告があり、（図.19）ミュルーズのフランクリン広場に1880年代、東洋の品物を扱う店が存在していたことがわかっている。地方都市ミュルーズにおけるジャポニスムの流行をもの語るものとして興味深い。その内の一枚には次のようなことが記されている。

「当店では、アパートの室内を飾るための新、古美術品、家具、ブロンズ、陶器、象牙、布、絹、ござなど中国、日本、ペルシアなどからの商品の展示即売会を準備中です。皆様のご来店をぜひお待ちしております…[20]」

その他にも、1893年には日本から稲畑勝太郎（1862-1949）という人が日本の図案を含む雑誌をミュルーズに送ってきて、それをデザイナーのショーンノップが調べたという記録もある[21]。稲畑は1877年染色技術を学ぶために京都からリヨンへ伝習生として留学した人で、日本にフランスの染色の技術を持ち込んだ人として知られている。それまでドイツから輸入していた[22]のに代わって1890年に日本で初めてフランス染料を扱い、フランス・サン・ドニ会社Société aniline des matières colorantes et produits chimiques de St. Denisの日本

図.19：ディートランの店の広告Prospectus da magasin H.Dietlin、ミュルーズ染色美術館

代理店として京都に染料店を創立した人である[23]。

さらに、ミュルーズ染色美術館にある興味深い日本の資料は染色用の染め型紙である。次の図.20左がミュルーズで描かれた下絵、右が日本の染型紙であるが、型紙がいかにデザインの参考になっていたかがよく分かる。

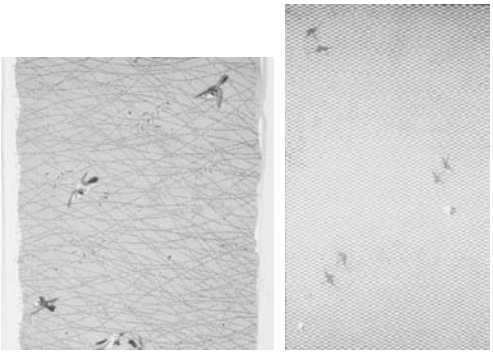


図.20　左：染織用下絵、19世紀後半
右：日本の染型紙、共にミュルーズ染色美術館

このような型紙のコレクションはヨーロッパ各地の美術館に存在しているが、ミュルーズ染色美術館には約180枚の型紙がある。19世紀に美術館に寄贈されたものは内67枚で1874年の受け入れとなっており、ミュルーズのすぐ近くの町コルマー在住者からのもので、今まで例にあげた型紙同様、いくつかは染色布の下絵に類似したものがあり、デザインのヒントとして参照されたものと思われる。

５．ミュルーズと日本の関わり

５－１．ミュルーズ産業協会紀要から知る日本の染め技術と経済

ミュルーズ産業協会は市の工業発展に関心を持つ人々が結集して1826年に結成された組織である。協会の活動は、化学、デザイン、機械、商業などいくつもの専門分野の委員会を持ち、そこで新しい発明や発見の情報を交換することで、その内容は設立と同時に発行された紀要に掲載された。また、時には講師を招いて講演を主催することもあり、ミュルーズの産業振興に重要な役割を果たしていた。この紀要の中には日本についての記事がいくつかあり、それらを拾い出すと1870年代の終わりからは、今あげたような日本の図案への関心から次第に台頭してきた日本の染色の伝統技術を探ろうとしていること、競争相手となりうる日本への危機感を持ち始めていたことなどがわかる。

1876年の報告書には、シュレール・ロット Scheurer-Rott という会社が日本の紅花染めについて横浜から手紙を受け取っている。この会社は1869年に日本への輸出をおこなっていた会社である[24]が、当時自らの製品をより日本人の好みに合わせるために染め技術の情報を集めていた[25]。

また、1880年には日本近海で採れる海草を使って糊の代用にすることについての報告もあり[26]、染織に関わる全ての情報収集に積極的であったことがうかがえる。それは明治25年に開発された引落友禅に使用した一珍糊の成分についての報告で、一珍糊は小麦粉を煮て米糠と消石灰を混ぜ、ふのり液を加えて作られる[27]。この「ふのり」がミュルーズの産業家にとっては重要な情報として伝えられた。

1900年のパリ万博における染色部門の報告には、日本について以下のように述べられている。

「日本の染色部門の出品物は本当に驚きに値するが、美的レベルだけではなく、その奇妙な制作方法もかなり発展している。例えば『絞り』という技術などは非常に時間がかかる…[28]。」といった報告がされている。

また、日本の経済についての報告としては、次のようなことが書かれている。

「ミュルーズは1865年というかなり早い時期から日本への輸出を始めてきたが、20世紀の初頭になってから日本の状況は変わってきた。商業上の強敵となってきたからだ。1905年にパリ政治学院で『日本経済の将来』という講演会が開かれ、その要旨は報告書にすべて掲載された。内容的に

は、日本がなぜ強くなってきたか、日本は極東を全て自分の市場と思っているがそうではないこと、労働条件は厳しいので、これから問題が出てきて、このまま発展が続くはずはないこと[29]」といった内容が紹介された。この段階ではミュルーズの人にとっては日本はそんなに脅威ではないという楽観的な内容となっている。

ところが、２年後の1907年の報告書はもっと深刻で日本を警戒せよという内容になっている。それによると、

「特に日本の綿糸工業は重要なものになって、相当発展してきている。ヨーロッパをも駆逐する勢いで、このままではフランス領インドシナで作らせている綿工業が危なくなる。日本の綿糸は安価で他のどの国もここまでできない。だから『この黄色人種の危機（黄禍）に対抗する準備が必要である』[30]」という内容となっている。ミュルーズの産業家も日露戦争後の日本に脅威を感じ取っていたのであった。

５－２．明治の染織雑誌から知るミュルーズ

一方、日本の方ではどれくらいミュルーズが知られていたかというと、明治23年（1890年）頃からは染色専門の雑誌においてミュルーズが紹介される機会があった。それらは次のようなものである。

松平 忠太郎、西洋染色術沿革「大日本織物協会報告」1890年[31]

「…『エルザス』州の『ミュルハウゼン』府とす始め同州コルマル府に『ジオカン、ハウスマン』氏なるものあり佛京巴黎府に留学し此術を研究して新たに工場を同府に設け後之を『コルマル』に移し終に『ミュルハウゼン』府に於て之を起こすに至れり方今化學及び機械學の進歩一層著しきを加へ更紗形附法も亦一層精巧を極め終に今日の盛況を呈するに至りしなり…」

「染色雑誌」1890年/ 型染工場[32]

「…佛國は第一ナポレオンの盛時より此の業大に進み年々五百萬個以上を染め出したる由なれども三十年前普佛戦争以来此の業の盛大なるエルサス、ロルレイン（ママ）の二州獨逸國に属せしを以て此業頓に衰頽せり獨逸國に於て此の業の最も盛なるは此の二州にして此に次ぐものは伯林…極めて精巧のものは器械形染に如かず當市（呉野市、クレフェルド）に此の器械あるは染業學校及び其の他二三の工場のみ多くはニュールハウゼン(ママ)に送り此處にて型染せしむ型染器械にして現今に至る迄發明されしもの少なからず今二三を摘記せん…」

「大日本織物協会報告」1898年、堀川新三郎、捺染業視察報告[33]

「客歳五月欧米捺染業視察の途に上り奮謄帰朝したる本邦毛斯倫染の元祖堀川新三郎氏が同業者に報告したる大要左の如し

…同業に著名なるアルサル（ママ）州に至りしに其市は人口八萬、捺染業者十二あり内十一は佛人の所有にして一は獨人の有たり而して其中最廣大にして機械三十台備付けたる工場を視察せしに素より英國（マンチェスター）と匹敵すべくも非らず只入念の仕事をなせるのみ…」

これらの現存する資料や記録からわかるように、ミュルーズの方では輸出の目的から図案への関心が既に始まり、その後日本の伝統的染法や、経済の脅威といったことに関心が行っているのに対し、日本の方ではミュルーズの発達した染色技術、特に機械に関心が向かっており、図案のことはほとんど述べられていない。これらのことからも染色技術の近代化、工業化を目指す日本と輸出を念頭に図案を重要視してきたミュルーズとの目的の違いを見ることができる。

おわりに

以上のように、更紗から始まったミュルーズの染織が日本の文様を取り入れた経緯についてその流れを中心に考察した。実はこれと同じような例は他にもあって、フランスの絹織物の都市として知られるリヨンも元々は染織の町ではなく、大規模な商品取引市場であったものが、15世紀の初めにイタリアの高級絹織物に匹敵するものを自分たちでも作ろうとして発展した町である。また、フランスのお城の装飾として重要なタペスリーなども、17世紀ころからアフリカやアラブの要素が入り、18世紀には中国のシノズワリーも入っている。このように考えるとフランスの染織における外国からの影響は重要で、何世紀もの間に受容の段階を経て変容が行われ、フランス独自のものとなってきたものではないかと思われる。しかし、19世紀後半、東と西が直接出会う時代になってからは、それが急速に進んだのは事実である。染織においてジャポニスムが大きく拡がったのは、18世紀に流行した中国の陶器などと違って、持ち運びの点でも輸出輸入がしやすいこと、媒介となった図案も浮世絵や型紙などで移動させやすいものであったという点も見逃せない。これらのことがよりグローバリゼーションを速め、ミュルーズの輸出のような活動を可能にしたと言える。また、染織が発展する重要な要因の一つに経済的理由がある。ミュルーズはその典型的な例で、この都市における染色産業の誕生自体がそのことに基づいていると言える。

注

1　京都工芸繊維大学、工芸資料館所蔵。19冊からなる。

2　Etienne JUILLARD: Deux siècle d'exportation textile Haut-Rhinoise (1750-1950), *Bulletin de la société industrielle de Mulhouse*, p. 115, 1950.

3　Claude Le Peletier (1630-1711) lance l'arrêt de prohibition du 26 octobre 1686. Seignelay écrit en ce début 1686 : « la seul chose que l'on reproche à la Compagnie des Indes est de ruiner par les grands retours de toiles, les manufactures de France ».
Micheline VISEUX, Le coton, l'impression,1991, p. 98.

4　George HATT : Evolution économique de l'impression en Alsace, *Bulletin de la société industrielle de Mulhouse*, No. I-II, 1950, p. 26.

5　Société Industrielle de Mulhouse,L'histoire documentaire de l'industrie de Mulhouse et ses environs au XIXe siècle, 1902, p.287.

6　Jacqueline Thomé Jacqué: Explication générale, Catalogue d'exposition, Etoffes imprimées françaises, 1981, Kyôtô.

7　同上、6

8　ミュルーズ染織美術館、第１巻、フランスの染織１、アルザス・ミュールズ・フランス各地、学研、1981年、及び前掲書４、George HATT。

9　染色法の一。凹凸の模様を彫った２枚から数枚の薄板で固く原糸や布を挟んで染料または抜染剤をかけて文様を作ること。また、そうして作った布帛。

10　Thierry-Mieg & Cie /... Mousseline laine pour le Japon, cachemire thibet et popeline laine pour la Turquie et la Perse, à la planche. (p. 454) 1863.

11　Mentionnons encore, parmi les articles spéciaux imprimés sur tissus de laine pure, une ingénieuse fabrication des tissus pour le Japon, qui fut imaginée vers 1867 dans la Maison Frères Heilmann, de Mulhouse. (p. 334) 1867.

12　A.Scheurer, Rott & Fils, Articles pour le Japon au rouleau. (p. 334) 1869.

13　Georges HATT : Evolution économique de l'impression en Alsace, Bi- centenaire de l'impression sur étoffe en Alsace, p. 27, 1946.

14　«…Plus tard, vers 1865, M. Boutex de Paris nous fit imprimer à façon des dessins destinés au Japon, et qui d'abord faits à la main, ne tardèrent pas à réussir au rouleau. C'étaient d'abord des camaïeux rouges et rose (sic), ou à deux violets et plus tard de grands dessins japonais ombrés où dominaient le gris et le violet. Cet article prit à son tour un certain développement, mais sans sortir des limites du pays auquel il était destiné.. »
Thierry-Mieg, Archives, Mulhouse

15　毛斯綸協会編：「染色図案變遷史」1929年によると「明治９年の舶来モスリン模様、比頃流行せる縮緬友禅を模したるものにして図案は内地において作製し外国に於て加工せられたる物なり、田村駒商店所蔵モスリン友禅時代帖より」

16　大阪絵具染料同業組合編：「絵具商工史」p. 1032、1937年。

17　«... Divers objets rares de curiosité, provenant de la Chine et du Japon, envoyés par M. Cézard de Nancy, membre correspondant, établi à Batavia » *Bulletin de la société industrielle de Mulhouse*, No.11, P. 87. 1837.

18　「芳瀧画集」国文社、1931.

19　「浮世絵事典」下巻、画文堂、1971.

20　« La maison H. Dietlin, place Franklin Mulhouse a préparé une exposition spéciale et met en vente à des prix très favorables ses objets d'arts antiques et modernes, Meubles, Bronzes, Porcelaines, Ivoires, Etoffes, Soieries, Nattes, de provenance authentique de Chine, du Japon, du Tonkin, de la Perse, et des Indes, pour meubler les appartements et décorations ... Mulhouse 10 Décembre 1888. »

21　«M. Katsutaro Inabata, à Kyoto (Japon), annonce l'envoi de deux fascicules d'un journal de dessin paraissant dans ce pays.__ M. Schoenhaupt, directeur du musée industriel, est chargé de l'examen de cette publication. » p.62, Bulletin de la Société Industrielle de Mulhouse, No. 63, juin 1893.

22　山内栄太郎：「独逸製アニリン染料と佛国製アニリン染料」「大日本織物協会報告」No. 71、p. 8、1893年 9 月15日。

23　大阪絵具染料同業組合編：「絵具商工史」p.864。

24　L'histoire documentaire de l'industrie de Mulhouse et environs au XIXe siècle, 1902. 1869, A. Scheurer, Rott & Fils, Articles pour le Japon au rouleau. (p. 334)

25　«... M.Albert Scheurer rappelle à ses collègues qu'une note déposée par lui en 1876, à la Société industrielle, accompagnée d'une caisse d'échantillons de drogues concernant le rouge ponceau employé par les japonais, s'étant égarée n'a pas pu être livrée à la publicité. Cette note consistait principalement dans une lettre de MM. Sieber et Brennwald à Yokohama, expliquait la préparation de la laque de safran telle qu'elle est pratiquée par les japonais. » (Note sur le rouge ponceau des japonais, documents présentés par M. Albert Scheurer, Séance du mars 1893, Lettre de MM. Siber et Brennwald, Yokohama 17 janvier 1876.)

26　« M. le secrétaire communique une lettre de M. Gartner adressée à M. le docteur Jannasch, sur l'emploi que pourraient trouver dans l'industrie les algues, recueillies sur les côtes du Japon, comme succédanés de l'amidon, de la colle ou de l'albumine. M. Vauchor se charge d'examiner la question et fera venir à cet effet des échantillons des qualités les plus intéressantes. La lettre de M. Gartner sera déposée aux archives. » (Comité de Chimie, Séance du 10 Novembre)

27　志村光弘：「精緻な美、明治染織」p. 130, 別冊太陽、No. 70、平凡社、1990年。

28　«... Les impressions sur laine, soie ou coton, en genres spécialement japonais, sont de toute autre fabrication et nous étonnent, autant par le goût artistique qui y est développé que par les modes bizarres d'exécution. Un autre procédé de fabrication, aussi long, par exemple, que simple, est celui employé pour les shiboris ou teintures à noeuds...Cette fabrication, quoique exécutée, en général, sur une matière première très commune, présente un cachet artistique très prononcé…» (Séance du 29 mai 1901)

29　« D'un point de vue commercial, l'intérêt des mulhousiens pour le Japon a commencé très tôt puisque, comme nous l'avons montré dans la première partie de ce chapitre, ils ont imprimé dès 1865 des tissus spécialement destinés à ce pays. Cependant, au début du XXème siècle, la situation du Japon a changé : c'est maintenant une puissance commerciale naissante.

Les mulhousiens considèrent ce pays comme un concurrent potentiel, et le " Bulletin de la Société Industrielle " publie des études tendant à analyser ce risque. Ainsi, en 1905, Achille Vialatte, professeur à l'Ecole libre des sciences politiques de Paris, donne une conférence sur " L'avenir économique du Japon ", qui est reproduite dans le bulletin. Après un bref rappel de l'histoire du Japon, il pose en ces termes l'objet de sa conférence : ...

Il décrit ensuite les atouts et les faiblesses du Japon en matière économique. Si, selon lui, les européens doivent s'attendre à une concurrence de plus en plus active du Japon sur le marché intérieur ainsi qu'en Extrême-Orient (" *les Japonais considèrent d'ores et dejà ces marchés comme leur appartenant* "), sa conclusion est somme toute " optimiste ": " ... Examiné de près, le péril économique japonais diminue, on le voit, singulièrement d'importance. L'industrie japonaise ne saurait progresser avec la rapidité dont on a voulu parfois nous effrayer. Elle rencontre sur sa route plus d'un sérieux obstacle, qui ralentiront son élan, ses chefs auront dans l'éducation des classes ouvrières une tâche laborieuse et singulièrement difficile, et elle n'évitera pas, au cours de sa croissance, des crises économiques et financières qui lui causeront de sérieux ébranlements. D'autre part, le champ de la

concurrence qu'elle pourra faire à l'industrie européenne se trouvera nécessairement limité ... ” ».

30 «Cependant, deux ans plus tard, le “ Bulletin” publie une lettre de M. Th. Hanhart au président de la Société industrielle de Mulhouse, aux accents beaucoup plus alarmants. Th. Hanhart est administrateur délégué de la Société cotonnière de l'Indo-Chine et conseiller de commerce extérieur. Il commence par une analyse de l'industrie cotonnière, “ *la plus importante du Japon* ”. Elle a fait tant de progrès qu' “ *il est non seulement à prévoir que le marché du Japon sera fermé à l'Europe, et même qu'il ne tardera pas à fortement concurrencer l'Europe dans ses propres colonies, surtout dans les colonies françaises, comme l'Indochine...* ”. La principale raison en est la faiblesse du prix de revient de textiles japonais :

“ Le Japon est à même par la création récente de nouvelles filatures et de nouveaux tissages d'alimenter ses propres marchés et cela à très bas prix, grâce à une excellente main-d'œuvre bien disciplinée, au bon marché de celle-ci, et grâce aux divers facteurs constituant le prix de revient qui ne peuvent être obtenus par aucune autre nation.”

Les autres atouts du Japon sont selon lui “ l'excellente politique douanière, l'esprit d'entreprise de ses chefs d'industrie et leurs capacités non seulement techniques mais surtout commerciales ... ”. Il conclut sa lettre par un vibrant “ Nous sommes donc avertis : préparons-nous à la lutte contre le Péril Jaune”.

L'avenir économique du Japon, conférence par M. Achille Viallate, Séance du 22 février 1905. » Lettre de M. Th. Hanhart, séance du comité de commerce du 20 juillet 1907, *Bulletin de la Société Industrielle de Mulhouse*, tome 77, 1907.

31 No. 40、p. 8 、1890年２月25日。

32 No. 1-11、pp. 324-326、1890年９月15日。

33 No. 136、p. 40、1898年２月。